

銅座掛屋と住友家

宮 本 又 次

一、住友、三井の銅座掛屋御用

文政2年6月29日大阪において住友吉次郎は三井高一（新町家第5代高雅養男）高益（小石川家第6代）らと共に大阪銅座掛屋御用を命ぜられた。¹⁾すなわち文政2年5月27日に大阪銅座より泉屋吉次郎と三井大阪店に対し、大阪銅座より相談申したき儀ありとて呼出しをうけた。

三井と住友とが罷り出たところ、銅座役人兩人立会にて、その由を申し渡される。兩人共に大造の銀高にて、無人であるから相勤めがたいと謝絶したが、なかなか聞き入れられない。6月28日夜に東町奉行所唐物方御役所へ差紙をもって29日5ツ時に名代一人ずつ出るようにと命ぜられる。大阪の三井元之助店名代福田吉十郎と住友吉次郎名代源右衛門が罷り出で、これまで銅座に掛屋がないから掛屋方をつとめるよう命ぜられ、遂にこれを引きうける。²⁾

7月12日に「仕法書」を出し、引当物は年分平均1ヵ月凡銀高8・900貫目の引当を両家より出すことになる。御所方、両御役所、二条御蔵方御入用銀請取の節、入用銀をいつ頃下されるかを聞いている。³⁾そして両家はよく相談し、打合せをなしている。

結局三井元之助は証拠担保として、家屋敷を家質として差上げることになるが、それは常盤町1丁目北側中通り、東角、表間口京間6間、裏巾京間6間、裏行京間26間4尺3寸4分、沽券金は天明3年の沽券状（天明3年3月7日買求）の金高1,000両の内3割引の積金700両としている。⁴⁾家屋敷の沽券高の7割を家質高とするのが普通であった。

これに対し住友の方では山本新田の住友吉次郎の河州若江郡山本新田元代銀

銅座掛屋と住友家

434貫890匁余の地面を引当に差出すことにしている。⁵⁾

すなわち三井組からは江戸表所持の屋敷、沽券高 3,710両、住友吉次郎方からは河州若江郡山本新田、元代銀434貫890匁余を地面引当として差出すことにし、この証拠金銀根証文は町奉行所に双方から差上げて、預けている。そして銅座の方では、この際所有していた有銀の分は双方の掛屋に引渡し、以来すべて金銀に関しては銅座掛屋にて取扱われることにしている。

住友吉次郎の方は銅座掛屋の御用向を本宅にてつとめていては、銅方御用と混雑するので、豊後町の吉次郎両替店にて御銀の取扱をすることになっている。⁶⁾

元来銅座は諸国銅山より出る荒銅を大阪の間屋を通じて悉く買上げ、これを銅吹屋仲間をして精煉させ、棹銅にして長崎に廻送し、その残余は民間に払い下げていたが、このとき掛屋がその「納銀の取立て」「長崎御用銀」「地売銅代」「御貸付方銀」などのことをその主要な業務にするようになる。

銅座掛屋としては「納銀」の取立業務がその主要なものであったろう。納入共より直ちに荒銅を掛屋に渡すと、掛屋は銅座宛の請取手形を取立て、この手形が銅座に納まると、印鑑と引合せ、改めた上、銅座役所請取手形に引替えて納入に渡す。そして掛屋請取手形の方は銅座に受けておいた。

すなわち銅座へ荒銅を納めた納入には手形を渡し、この手形が銅座役所にまわると、留めておいて、月々勘定のときにもどし、下したのである。「地売銅代」の分は吹銅切手に引替にして、渡した。

地売銅は業者が先金を納めて、銅座より買いうけるのであったが、これを吹所の銅蔵に預けておいて、必要あるごとに銅座発行の「先金相納済の切手」と引換えに請取る慣例であった。

「御金蔵御納銀」については、相当早い時期に御納銀高の書付を住友、三井に渡してほしいといっている。そのときには両家割合にて請書を差上げる。その日限までに常是包にして場所へ持参するだろうし、上納がすめば、その銀高並びに御定諸入用銀と共に振出手形にして渡してほしい。常是の方へ包立ての日限をいって下さると銀子を持参いたし、包立がすむと持ち帰り、預りおき、

銅座掛屋と住友家

御納日には場所へ持参し、御上納がすむまでの一切のことは引請けるであらう。この常是の入目銀、包料、箱釘紙縄、人足賃、縄からみ手間入用は、御定銀として1貫目につき6匁7分5厘宛の内にてする。そのときの宰領には手代共一兩人差添えにて、諸事をとりはからう。

「先納銀」については、もし両家より、2・300貫目までのところは御掛紙の趣を承知している。しかし御入用のことを差廻りに仰せ付けられても差支えて間にあいかねるから前広に沙汰しておいてほしい。そのときには銀子を繰合せて用達するであらう。これは月末に先納する。1カ月分7朱の利息である。返済の節はその月の10日迄であると、半月半月の利息を下されたい。10日迄の場合には1カ月の積にて勘定されたい。諸雑費として銀1貫目につき1匁宛を下しおかれたい。月々勘定のときにいただく。

「長崎商売銀」「年賦納銀」「貸付方銀」「諸向納銀」の分は銅座役所請取手形に引替、納人に渡し、掛屋請取手形の方は銅座にうけとっておく。ただし銀座買請灰吹銀は右代銀を掛屋へ銀座の方から渡した。掛屋請取書を銀座へ持参すると灰吹銀を渡してくれる。

銅座から諸向へ金銀を渡すときには、手形割印帳へ月日、銀高、名前などの相印をなし、雛形の通り掛屋宛の振出手形にそれぞれ割印をなし、御詰衆の改印をうけた上、右手形を請取人に渡し、掛屋方にて銀に引替えて請取らせる。

「御金蔵への納め金銀」は後藤常是包料、御蔵持運人足雇賃、その外の納方諸雑用がかかるので、そのため諸入用銀1貫目について、6匁7分5厘宛を掛屋に下される。

「長崎商売銀」は入目納になっているから、入用銀を掛屋に下されたい。銅払代銀その外掛屋方の手掛けている銀子どもは、銀1貫目につき、8分ずつ掛屋に下される。

「銅座への請取金銀」は住友、三井の掛屋へ納人が持参すると掛改をなして請取、納人には銅座役所宛の預り手形を渡す。

「銅座よりの諸向渡方の金銀」は銅座より住友、三井宛の振出手形をもって

銅座掛屋と住友家

渡すと、掛屋が改包をなして渡す。これは掛屋が銅座へ請取にいて、また御渡方のときに持参していれば、手数雑費がかかり、迷惑だから、納人より掛屋へ納めることにしたのである。

「銅座が金子を買上げ」るについては、その節々の書上相庭にかかわらず、銀座両替屋共へ入札を申しつけ、開札の上銀高を取りきめ、掛屋宛の振出手形を落札人に渡し、正銀はこの手形に引替えて掛屋より直ちに請取らせる。

「銅座よりの江戸や長崎への下し金銀」があったが、これも銅座掛屋のとりあつかうところで、その諸雑費は江戸表下し金銀の場合、道中20日として、金100両につき賃銀8匁5分、銀10貫目には賃銀95匁、長崎表下し金、金100両につき賃銀30目、銀10貫目につき賃銀70目であった。

「松前表下し金」もあったが、これは金子買入銀高入札の上取りきめ、これまで通り津飛脚に申付け、請負証文を差出させ、掛屋宛の振出手形をわたし、正銀はこの手形に引き替えて、掛屋よりうけとる。

「佐州荒銅代、俵物代、人參座用達金」は無賃にて為替両組に渡して来たから、これはこれまで通りにする。

「江戸鮫屋重吉への下金」は金相場落札のものより、為替証文を銅座へ出させた上、銅座より掛屋宛の振出手形を渡し、正銀はこの手形に引き当て、掛屋より請取らせる。

「掛屋から納人へ渡す銀座宛の預り手形」「銅座から請取人へ渡す掛屋宛の銀手形」は毎月晦日銀差引勘定帳を出させ、銅座納払帳へ突合せ、手形は月限消印をする。ただし残銀は月限一紙手形に引き替えて差出す。

有金銀不足のとき掛屋方より振替えた場合には7朱の利付をもって、300貫目までは差出させる。

「銅座、俵物役所御貸付方」の諸雑用、その外一統の手当給料は銅座よりの振出手形を掛屋に渡す。掛屋へ下される諸雑費および振替銀は、利銀など諸向渡方同様に銅座より振出手形をわたし、その月の差引勘定に相立たせるようにする。

銅座掛屋と住友家

「長崎表よりの正金銀」が仕寄せられたときには掛屋のものを呼出して渡し、預り証文を出させる。ただし唐金を銀座へ持ちこし、御金蔵納になるまではこれまでの振合通りとする。

住友、三井両家が銅座掛屋をつとめるにつき御預け金銀の割方は金 200 両ならびに銀10貫目以上は両家にて割合うことにする。

金 200 両ならびに銀10貫目以下のときには住友、三井の内一軒に隔番に渡すこととする。そして月銀勘定のときに双方の預け銀高が格別に不同なきようにいたしたい。

また諸向の御渡銀もこの預け銀の割合にて振出手形で、両家へ渡してほしい。

納入に渡される手形の雛形は後掲史料中に出ているから参照されたい。

諸向渡方になる金銀も先にのべた通りの御預け金銀の割合にて住友、三井宛の振出手形を諸向に渡し下さるべく、この手形が住友、三井に廻って来たときには銀子を渡すであろう。そのときは、この手形へ「相渡し」の印形を仕る。

御金蔵へ納銀があるときには、前もって納銀高の書付を下しておかれたく、そのときには住友、三井両家の割合請書を差上げるであろう。

以上は住友、三井が銅座掛屋となったときの史料 3 点によって、その大要を要約したものである。

すなわち文政 2 年 7 月の「銅座御役所御用勤方仕法書付」と、文政 3 年 4 月 6 日の「銅座地役人より御勘定所江差出候已来銅座役所取扱方手続書写」と、同年辰 3 月 23 日付の「掛屋御用勤方手続書」によっている。それが、実際この通りに運用されていたかどうかは必ずしも明らかでないが、大体において銅座掛屋なるものの機能を伺い知ることが出来るであろう。

次にこの三つの史料を掲出しておこう。

(1)「三井家史料」三井高映家 226—257頁

(2)同上書 233頁

(3)同上書 243頁

(4)同上書 252頁

銅座掛屋と住友家

(5)「銅座地役人より御勘定所江差出候已来銅座役所取扱方手續書 写」(三井文庫、続1426—6)

(6)以下は主として「銅座地役人より御勘定所江差出候已来銅座役所取扱方手續書 写」「銅座掛屋仕法之条之内先例御尋書并大阪店住友方存寄書」(三井文庫、続1426—4)

「銅座御役所掛屋御用勤方仕法書付」(続1426—1)

「掛屋御用勤方手續書」(続1426—7)によつてのべる。一々注記しないことにする。

二、銅座掛屋に関する史料の紹介

以上において使用した三つの史料を次に掲出して紹介しておこう。私もいまだよく銅座掛屋の機能に関し、のみこめないで、生の史料をもつてその内容を窺つてほしい。いずれその他の史料を発掘して、もう少し進んだ検討をなし、その解明に資したいと考えているが、それは後日のことにまかせられたい。

(A)「銅座御役所掛屋御用勤方仕法書付」

三井組名代

石井与三兵衛

福田吉十郎

住友吉次郎

(三井文庫 続1426—1)

乍恐以書付奉申上候

三井組名代

石井与三兵衛

福田 吉十郎

住友 吉次郎

一、銅座掛屋御用今般私共江被為仰付冥加至極難有仕合奉存候右に付仕法書可奉差上旨奉畏候乍恐左に奉申上候

一、銅座江是迄御請取金銀以来私共店江納入致持參候様仕度奉存候左候はば掛

銅座掛屋と住友家

改仕請取置則納入江銅座御役所宛之預り手形相渡可申候諸向御渡方に相成候節は従銅座私共宛御振出手形を以御渡方に相成候はば私共改包を以相渡可申候尤銅座江金銀一旦御請取置被遊候上は掛屋請取に罷出猶御渡方之節に持参仕候様相成候而者手数雜費相掛り迷惑可仕候同前文奉申上候通納入より掛屋方江相納候様仕度奉存候事

- 一、右之通正金銀に而請取候儀に付大銀高同日に持参仕候而者掛改出来兼混雜仕候間一目に銀高凡何程宛と割合持参仕候様納入江被仰付度手馴候はば追々銀高相増候様可仕候事

但三井組方外御用向に而差支候日茂可有御座哉難斗奉存候左様之節者時宜に寄納日限翌日又は翌々日持参候様申談度尤右之段其節銅座江御断申上候様可仕候事

- 一、長崎商売銀者別に入目納に相成候段承り仕候右入用銀掛屋江為諸雜費被下置度并銅御払代銀其外掛屋方手掛け候銀子共為雜費銀老貫目に付八分宛是又被下置候様奉願上候

- 一、御銀御金蔵納に相成候節は銀老貫目に付八分宛為諸入用被下置候様仕度奉存候事

- 一、金子御買上げ之儀而替方より御役所向江奉書上候相場より三厘上ゲを以御買上被為成下候様仕度尤是迄之通入札に被仰付候而者掛屋御用承仰居候規模無御座入札に被仰付候時は何れ少々喰違茂御座候得共是は何卒掛屋渡世料と思召被為仰付被下度奉存候猶又其時々之模様に寄随分相働御定より相減候様出精可仕候

- 一、私共より納入江相渡候銅座御役所宛預り手形猶又銅座より御振出手形勘定之儀者毎月差引仕勘定帳面仕立差上候節一紙限り手形と引替差上候様仕度奉存候事

- 一、右銅座より御振出手形御印鑑奉申請度奉存候私共預り手形印鑑差上候様可仕候事

- 一、江戸長崎下し金銀諸雜費左に奉申上候

銅座掛屋と住友家

一、江戸表江御下し金銀之分

道中廿日限

一、金百両に付 此賃銀八匁五分

一、銀拾貫目に付 此賃銀九拾五匁

メ

一、長崎表江御下し金銀之分

金 百両に付 此賃銀参拾目

同

一、銀拾貫目に付 此賃銀七拾目

一、右江戸表長崎表御下し金銀取扱方御用向掛屋江被仰付候様仕度奉存候事

一、金銀振替先納等之儀多少に不拘一切御断奉申上度奉存候事

右拾ヶ条之趣得と相調^(カ)子候に付奉申上候

何卒右仕法通被為仰付被下置候はば右掛屋御用永久御大切に可奉相勤候乍恐右
之趣書付を以奉申上候以上

文政二年卯七月十二日

住友吉次郎

代 与三兵衛 印

三井組名代

福田 吉十郎 印

石井与三兵衛 印

御奉行様

(B) 「掛屋御用勤方手続書」

(三井文庫 続1426—7)

掛屋御用勤方手続書

一、当御役所掛屋御用於御奉行所被仰付候に付仕法帳奉差上候処右帳面江御掛
紙を以被仰渡候御趣奉畏候依之取扱方勤向等左に申上候

銅座掛屋と住友家

一、当家に而相勤候に付御預金銀割方之儀者金二百兩并銀十貫目以上者両家江御割合金二百兩并銀十貫目以下者老軒江隔番に御渡被下月銀勘定之節に至双方御預け銀高格別不同無之様御預け被下度且又諸向御渡銀も右御預け銀に御割合御振出手形両家江御渡可被下候

一、納入江相渡候手形左之通

美濃紙三ツ切相用可申候

何之何番割 覚

(三井) (忠良)

一、銀 何程者

右銀子相改樋請取被申候追而此手形を以勘定可仕候仍如件 三井組名代

年号月日

福田吉十郎 印

銅座御役所

石井与兵衛 印

何之何番割 覚

(元方改) (住友)

一、銀 何程者

何屋誰納

右銀子相改樋請取申候追而此手形を以勘定可仕候仍如件

住友吉次郎 住友

年号月日

銅座御役所

右者両家より納入江相渡候手形に御座候

一、右手形御役所江相廻り候はば御留置月々勘定之節御戻し可被下候

一、諸向御渡之方に相成候金銀茂前文御預け金銀之御割合に私共宛御振出手形

諸向江御渡可被下候右御手形私共江相廻り候はば銀子相渡候上 御手形江

相渡し此印形仕度奉存候則名前左之通

三井組名代

石井与三兵衛 宛

福田 吉十郎

住友 吉次郎 宛

右之通可被成下候尤月々勘定之節右御手形返上可仕候

銅座掛屋と住友家

- 一、御金蔵御納銀御座候節者前広に御納銀高御書付御渡可被下候左候得者両家
割合請書差上候様可仕候則左之通

覚

御納銀高何百何程貫目之内

- 一、銀高何百何拾貫目

右者来ル幾日御金蔵納に相成候段承知仕候御預ケ銀之内に而右日限迄に常是
包に仕場所江持参可仕候御上納相済候上右御銀高并御定諸入用銀共御振出手
形に而御渡可被下候以上

年号月日

三井組名代

銅座御役所

- 一、右同断 住友吉次郎

右両家より差上置追而常是江御包立之日限被仰下候はば銀子持参仕包立相済
候はば持帰預り置御納日に場所江持参仕御上納相済候迄一切引請に可仕候右
常是入目銀并包料箱釘紙繩人足賃繩からみ手間入用等は御定銀老貫目に付六
匁七分五厘宛の内にて可仕候 右宰領に手代共一兩人差添諸事取計可仕候

- 一、御操合に付先納銀之儀両家より二三百貫目迄之处御掛紙之御趣承知仕候併
右御入用之儀差廻り被仰下候而者差支御間に合兼候間御積り合にて前広に
御沙汰可被下候左候得者銀子操合用達可仕候右に付月末に先納仕候而も老
ケ月分七朱之御利足可被下候且御返済之節その月の十日迄に御座候はば、
半月半月御利足被下置度十日過候はば老ケ月老ケ月積御勘定可被下候

- 一、右先納御請取手形之儀番割利付先納被御振合可被成下候

- 一、為諸雜費銀老貫目に付老匁宛被下置候御儀月々勘定之節被下置候様仕度奉
存候則請取書左之通

覚

- 一、銀何百何拾匁者 諸向より納銀高何百何拾匁より老貫目に付老匁宛積
右者掛屋為諸雜費銀被下置槌請取申候仍如件

銅座掛屋と住友家

年号月日

三井組名代
両 人 印

銅座御役所

一、右同断

住友吉次郎 印

右之通差上候様仕度奉存候

一月々勘定帳面認方左之通

年号月

御金銀諸払勘定帳

三井組

岩国半紙

右同断

住 友

入 方

月日

一、金 何程 何屋誰納

何代金

月 日

一、金 何程 何屋誰納

何代金之内

月 日

一、銀 何程 何屋誰納

何代銀

月 日

一、銀 何程 何屋誰納

何代銀之内

メ 金何程 預り手形何程請取申候

銅座掛屋と住友家

銀何程

払 方

月 日

一、金 何程 何屋誰渡

何代金

月 日

一、金 何程 何屋誰渡

何代金之内

一、銀 何程 何屋誰渡

何代銀

一、銀 何程 何屋誰渡

何代銀之内

× 金何程

銀何程 御振出手形何程返上仕候

右之通納払手形ヲ以殘銀高慥奉預候依て一紙手形差上候処仍如件

年号月

住友吉次郎

一、右同断

三井組

右之通月々勘定帳差上申候

一、住友吉次郎より為証拠銀河州山本新田地面書上候に付御水帳老冊并沽券老
通御奉行様江奉差上置候

一、掛屋両家手形印鑑并封金銀印鑑別紙差上申候

一、住友吉次郎儀本宅に而右掛屋御用向相勤候而者銅方御用向と混雜仕候同豊
後町吉次郎両替店に而御銀取扱仕度奉願上候

右手続書之通相勤候様仕度奉存候此段書付ヲ以申上候以上

文政三年辰三月二十三日

住友吉次郎 印

三井組名代

福田吉十郎 印

石井与三兵衛 印

銅座御役所

前書銅座御役所金銀掛屋御用向取扱方之儀折々手続書ヲ以申上候通相心得可
申旨被仰渡且金銀納渡共口々銀高前日に御達し可有之候に付右御達之銀高江
引合入念取扱可申旨是又被仰渡奉畏候

文政三年辰四月六日

三井組名代

石井与三兵衛 印

福田 吉十郎 印

住友 吉次郎 印

銅座地役人より御勘定所江差出候已来銅座役所取扱方手続書 写

此度銅座掛屋三井組并住友吉次郎江被仰渡候に付御用中為証抛三井組方は江
戸表所持屋敷沽券高三千七百拾両、住友吉次郎方は河州若江郡山本新田元代銀
四百三十四貫八百九拾匁余、地面引当に差出、右証抛金銀根証文之儀は当所町
御奉行様江双方より差上置御預り置之候趣被仰渡候に付掛屋印鑑被差出 当時
銅座有銀之分掛屋江引渡候に付以来於銅座取扱候手続之儀左に申上候

一、納銀取立之儀長崎御用銀并地壳納代御貸附方銀共其度々納入共より直に掛
屋江相渡掛屋より銅座宛之請取手形取立右手形銅座へ相納候はば印鑑引合相改
候上、地壳銅代之分は吹銅切手に引替相渡、長崎商売銀并年賦納銀并貸付方銀
諸向納銀之分は銅座役所請取手形に引替納入江相渡、掛屋請取手形は銅座江受
候置可申事

但銀座買請灰吹銀之儀は右代銀掛屋へ銀座より相渡、掛屋請取書銀座へ持参
候はば灰吹銀相渡可申候事

一、諸向江金銀渡方之儀手形割印帳江月日銀高名前等相印別紙雛形之通掛屋宛

銅座掛屋と住友家

之振出手形江夫々割印仕 御詰衆御改印ヲ請候上右手形請取人へ相渡掛屋方に而正銀に引替為請取候様可仕候事

- 一、納銀高相嵩掛屋方手違候節は銀高割合を付掛屋方混雜不致候様取斗可申事

但掛屋方外御用に而掛包差分候節は一兩日日延之所可申出旨掛屋申立候得共長崎商売銀等其番所納銀も有之候間掛屋差支之趣を以相延候而は納銀之内ゆるみに相成候儀に付其節は掛屋江申談日附不相延様取扱可申候事

- 一、御金蔵江納金銀之儀は後藤常是包料御蔵持運人足雇賃其外納方諸雜用相掛候に付右為諸入用銀老貫目に付六匁七分五厘宛掛屋江被下候積相心得可申候勿論御貸附方銀は諸家より常是包にて相納候間包料は差引に相立させ候様掛屋江申立置候事

但御上納に付御蔵江出役之儀は私之内老入下人老入掛屋之者召連罷出可申候

- 一、掛屋方江被下候諸雜費之儀は御下知之通銀高老貫目に付銀老匁宛之積月々勘定帳納銀高に割合相渡可申候事
- 一、金子御買上之候儀其節に書上相庭に不拘於銀座而替屋共江入札申付開札之上銀高取究掛屋宛之振出手形落札人江相渡し正銀は右手形に引替掛屋より直に為請取可申候事
- 一、松前表下し金之儀金子買入銀高入札之上取究是迄之通津飛脚之者へ申付請負証文為差出掛屋宛之振出手形相渡正銀は右手形に引替掛屋より直に為請取可申事
- 一、佐州荒銅代俵物代人參座用達金之分は無賃に而為替両組江相渡差下し来り候間是迄之通為取計可申候事
- 一、江戸鮫屋重吉江下金之分は金相庭落札之者より為替証文銅座為差出候上銅座より掛屋宛之振出手形相渡正銀は右手形に引当掛屋方より為請取可申候事
- 一、掛屋より納入江相渡候銀座宛之預り手形并銅座より請取人へ相渡候懸屋宛

銅座掛屋と住友家

之銀手形之儀は毎月晦日銀差引勘定帳為差出銅座納払帳江突合手形之儀は月限消印可仕候事

但残銀之儀は月限一紙手形に引替差出可申旨掛屋より申立御下知之通相心得可申事

一、有金銀不足之節掛屋方より振替候節は七朱之利付を以二三百貫目迄は為差出可申候事

一、掛屋方に而取扱候銀子之儀は諸口々振分は無之候得共御貸附方銀之儀は別口に勘定帳為相立可申候事

一、銅座俵物役所御貸付方共諸雜用其外一統御手当給料等都而是迄座方内に而請取来候分は銅座より之振出手形掛屋江相渡銀子包分銅座江為持出候様可仕且又掛屋江被下候諸雜費并振替銀差出候節は利銀等は諸向渡方同様銅座より之振出手形相渡し其月之差引勘定は為相立候様可仕候事

一、御詰所へ差上置候金銀納払帳之儀は是迄之通其時々御届可申上候事

一、長崎表より正金銀為仕登候節は掛屋之者呼出相渡頂り証文為差出候様可仕候事

但唐金銀座江持越御金蔵納迄之取扱之儀は是迄之振合に相心得可申候事

一、金銀出入之儀に付掛屋共江申達候儀有之候節は当役所江名代之者呼出申達候様可仕候事

一、長崎御奉行様御返坂并同座御詰勘定方御交代御引継之節且又銅座詰長崎会所役人交代引継候節是迄は銅座有金銀差返し相改候儀に有之候処、此度掛屋被仰付候に付卷返し之節は其節之有金銀仕分書銅座江可為差出候御付札に有之勿論此度證據地面等差上置候儀に付掛屋取扱中は正金銀差返しは不仕候様相心得可申候事

右之趣奉伺候可然様御下知御座候様仕度奉存候猶相洩候儀は追而取調可申上候以上

辰 三月

小沢 伊平太 印

銅座掛屋と住友家

佐藤 十太郎 印

柘植 長次郎 印

故 岡本八左衛門

為川 半十郎 印

為川 八三郎 印

御書面銅座御役所金銀掛屋私共江被仰付候に付於銅座御役所御取扱方桁々之趣是又於私共茂相心得御用御間欠に不相成候様可仕旨被為仰渡奉畏候 以上

辰 四月六日

三井組名代

石井与三兵衛 印

福田 吉十郎 印

住友 吉次郎 印

(C) 「銅座地役所人より御勘定所江差出候已来銅座役所取扱方手続書 写」

(三井文庫 続1426—6)

なお別に同様な史料として、別のものがある。その名のみをあげておこう。

(D) 「銅座掛屋仕法之条之内先例御尋書并大阪店住友方存寄書」

(三井文庫 続1426—4)

三、銅座掛屋としての住友の推移

三井と住友とがなぜこの文政2年になって新たに銅座掛屋に任命されたのであろうか。

それについては種々の事由が考えられる。

それは両家ともすでに巨大な豪商であり、しかも古くからの貿易商人であったことに由来するだろう。しかも両家とも両替屋を兼業している。その上長崎に出店を持っていることも相通じている。

越後屋は呉服商であり、両替屋であり、長崎では主として絹織物の直買をなしていたが、長崎会所の設立後は、長崎に進出し、唐人との直接交易はすでに

銅座掛屋と住友家

出来なかったにしても、長崎会所の入札には参加していたし、長崎には別家の越後屋宗助がいたし、中野用助という入札株をもつ長崎本商人をもおいていた。¹⁾

泉屋住友の方も寛文から元禄にかけては銅を唐蘭船へ売込んでいた代表的輸出商であり、長崎会所と銅座との連繫が成立すると、泉屋は銅座の統制下に入り、銅吹屋にすぎなくなるが、なお長崎貿易に重要な棹銅の生産者であり、長崎浦五島町通りには店と貸家とがあり、銅蔵もあつて、大阪からの廻送銅はここに荷揚げされていた。しかも三井は金銀御為替御用達であり、住友もかつては金銀御為替御用達であり、その経験があるし、大阪銅座長崎取寄銀為替などもつとめて来ている。²⁾

両家ともに大阪御金銀蔵御為替御用達をつとめ、大阪御金蔵にも出入していた。こんな関係もあつて銅座掛屋になる資格がそなわっていたと考えられる。

銅座の吹銅払下直段は銅座設立以来寛政9年までは吹銅100斤につき、代銀223匁に一定していたが、寛政9年以後は時の相場によることにした。

ところが文政2年に改めて入札をした。払下額を1年合計90万斤、払下回数を3回とし、京、大阪、堺の2カ所銅筋に関係あるものは素人たりとも入札に加わるを得せしめた。この仕法替の文政2年は銅座にとって一つの劃期であったろうし、このときに三井、住友の銅座掛屋登場となったと思われる。³⁾（大阪市史、第2、710頁）

文政2年には豫州別子立川銅山御用達としての住友吉次郎は、大阪銅座より、これまで諸山出銅の分は廻着次第、銅代を銅座より渡して来たが、今回は銅座より売下げた吹銅は以来月々売出をとめて、1ヶ年3カ度に売払うつもりだから、以来廻銅の分は代銀その節に渡さず、3カ度売払代銀をもって、割合にて渡すとの旨を銅座役人が申立てているから、その旨心得えてほしいとかいっている。しかも廻銅の儀はこれまで通り廻着次第に銅座へ納めるようにといっている。

なお文政2、3年頃には住友は金銀引替の御用を申しつけられることが多く、通用銀引替にて当局との関係も密接になつていたものであろう。⁴⁾

銅座掛屋と住友家

そうしたことで銅座掛屋になる下地が出来ていたとも考えられる。

幕府は長崎からの滞納を防ぐため輸入品を扱う各地の貿易商人に、長崎での輸入品の買入品の買入代金の一部を大阪で納めさせていた。

この方法は長崎での輸入品の入札のときに前年に各銅山から提出した御用銅の月別廻送予定表とにらみ合わせる。そして貿易額の中で大阪で取り立てる金額を決めた。それを入札看板にかき出して商人に知らせる。入札がすむとこれらの商人は輸入品の買高に応じて、大阪納めの金額の割当てをうけた。

五カ所年寄は、それぞれの商人について、この金は大阪の間屋何某から納めるという目録を作る。この目録に添状と証文を各自がつくって、差出す。この三つの書類は長崎会所から大阪の銅会所に送られて来たが、この飛脚の出発から30日後が納付期限になっていた。明和3年に銅座になってからは銅座に送られ、ここに納めることになる。⁵⁾この方法は幕末までつづいたが、文政2年以後は三井、住友の銅座掛屋がこの衝にあたったものであろう。

先に文化12年2月にはじまった銅山方手当貸付金のことについて述べたが、文政2年後は住友・三井は銅座掛屋として、これにも関与したであろう。諸家の返納は予定の如くいかず、年賦納になったこともあった。そうしたことも銅座掛屋の取扱うところとなったろう。

天保2年に至り、銅山方御手当貸付金の仕法替を行い、文政7年以前の方は利銀1割を5分に減じ、残5分を元銀返還の内に組入れさせ同10年に元銀の新規貸出しを廃した。また貸付分の取立てを命じた。元来年賦納并に年1割の貸付の分はもし期日に至り返済がないと廻米入津の節に、大阪川口において引当米を取立てるべき筈であったが、強いてこれを励行しようとする⁶⁾と廻米が大阪に入津せずに、他港におもむくおそれがあり、そのため取立方も容易でなく、証文の書替のみで、荏苒延期したものが多かった。住友、三井両家は銅座の掛屋として、恐らくはこうした貸付分の仲介手続をもなしたと想像される。

諸山出銅および古地銅を銅座に廻送すべき旨は明和3年、天明8年、寛政9年に触書があったが、天保12年4月にもまたこれを促して、取締りを強化している。⁷⁾

銅座掛屋と住友家

天保10年には廻着高はますます減じ、町中売買直段はいよいよ高直となった。御用銅の買上値段も延享3年以来据置かれていたが、実際上は御手当銀という名目で値上げが行われ、天保14年には172匁813に上った。⁸⁾弘化、文久には更に上る。

銅売下額は天保13年には依然として60万斤にとどまり、14年には増して80万斤となったが、売下方は入札法になった。弘化元年以後の売下高は入札毎に必ず当年吹銅90万斤の内30万斤、此節入札申付とするのを例とした。元治、慶応になると1回15万斤、10万斤、はなはだしきは5万斤という小量になってしまう。⁹⁾

文久2年閏8月江戸長崎2カ所に銅座出張所を設け、江戸は古銅吹方役所并に別段古銅吹所をもって、また長崎は銅置所をもって、その出張所にあてていた。¹⁰⁾

幕府は銅及びその合金類の吹立方並びに売買方を取締り、安政以後とくに統制を強化したのは外国貿易も武備充実の配慮からであったろう。すなわち幕府は銅及びその合金類の吹立方并に売買方を取締り、殊に安政6年9月従来銅類はもちろん唐金真鍮をもって製造せる品目の外、新たに以上の金属をもって製作することを禁ずとまでいうに至っている。¹¹⁾

(1) 山脇二郎「長崎の唐人貿易」260—263頁

(2) 同上山脇氏著書255頁、「泉屋叢考」第15輯

(3) 「大阪市史」第2、710頁

(4) 「垂裕明鑑抄」地の3

(5) 永積洋子「大阪銅座」（日本産業史大系、近畿地方篇、417頁）

(6) 「大阪市史」第2、398—399頁。「銅座方御貸付金一件」「大阪銅座方覚書」

(7) 「大阪市史」第2、708頁

(8) 永積前掲論文412頁

(9) 「大阪市史」第2、711頁

(10) 「大阪市史」第2、883—884頁

(11) 「大阪市史」第2、884頁

銅座掛屋と住友家

四、幕末維新時の住友と銅座廃止前後

住友では天保14年10月に銅座から豫州銅山の手当金を渡されている。すなわち別子立川諸雑費が相掛り、償金のみにて稼方難渋していると願出でいたが、格別のわけにて14年卯年より未年まで5カ年間山元仕入金償手当として1カ年金500両ずつを下し置かれることになる。そして天保14年にはすでに500両は定高納済になっていたにかかわらず渡され、なお1,000両は来年春早々に渡すとされている。

安政6年11月にも銅座の方から別子立川両山も追々鋪内遠所になり、失費も多いだろうから去る寅年（安政元年）から午年（安政5年）まで年々540貫目宛を御手当として下して来たが、年限が満ちて来たので、当未年（安政6年）から引きつづき下げ渡すといっている。これは格別の御手当筋であって際限もないことながら、出格の訳にて救助するものであるといっている。当未年（6年）から来亥年（文久3年）まで5カ年間これまで通り、1カ年銀540貫目宛を下しおかれる。これは江戸表よりの申し来りであるが、銅座より申し渡す事²⁾としている。

文久元年4月にも銅座より申し渡しあり、荒銅棹銅吹立平均100斤に付9匁1分8厘2毛を増すように吹方に精々念を入れること。その代り三幸山銅の御手当を100斤につき10匁ずつ、増すことを酉年（文久元年）より丑年（慶応元年）まで、聞きとどけるとしている。³⁾

文久元年9月には吹屋一同へ出格の訳をもって、銀300貫目の拝借を許している。その返済方は成年（文久2年）より20ヶ年賦にて、1カ年15貫目宛を返納することになっていた。⁴⁾

安政4年6月10代友視没、三男吉次郎友訓17才をもって家督相続、僅か8年で元治元年11月に世をさり、友訓の実弟卯之助が、浅田方をついでいたのを復籍させて、慶応元年4月住友12代の当主とした。吉左衛門襲名、友親と称した。同年8月10日友親に対し、別子立川銅山御用をつとめる中、御用達名目及び苗字御免を許した。⁵⁾

銅座掛屋と住友家

そして慶応2年3月は長崎産物会所掛屋御用を仰せつけられる。⁶⁾

またこの慶応2年4月には近來山方難渋の趣故、これまで子年より丑年まで御買上代の外、荒銅100斤につき銀300目宛別段御手当を下していた。しかも銅性によって吹減多分のものもあるから、当寅年(慶応2年)より午年(明治3年)まで5カ年間、銅座において荒銅100斤につき、吹減5斤までの分は、これまでの通り御買上代の外、別段手当銀300目を下されると申し渡している。⁷⁾

住友は銅座掛屋として、この際格別の恩恵を蒙ったであろうが、またこの事勢にも対処せねばならなかったであろう。

慶応2年7月になると長崎御用銅が廃止になった。すなわち長崎御用銅は和蘭商法が変革になったため、去る文久2年以来別子立川銅72万斤を長崎表へ差廻して来たが、以後は長崎御用銅は廃止になるから、地売銅の積をもって年々荒銅のまま大阪銅座江戸出張所の内へ売上げるようにせよと申し渡される。⁸⁾

慶応3年8月には住友は別子立川両銅山の出銅直売を御免にされたいと願出し、その代り年々冥加銀20貫を上納すると出願している。⁹⁾

これまでの住友は別子立川の両銅山の出銅を別子山中で粗銅(荒銅)に製錬し、海上を大阪に送り、大阪鰻谷の住友家屋敷の銅吹所で更に精銅、丁銅に製錬して、大阪の銅座に納め(御用銅)、幕府はこれを長崎に廻送し、オランダ・中国との貿易(輸出銅)にあてていた。銅座設置以降、住友が納める御用銅は毎年72万斤で、万延元年全国の御用銅の中秋田諸銅山60万斤、南部諸銅山53万斤であったのから見て、別子銅山の重みがわかって来る。

ところが上述の如く幕府は慶応2年対蘭商法を変革し、長崎御用銅を廃止したのであった。

そのため住友は別子銅山の出銅を荒銅のまま銅座に売却し、銅座から荒銅を買いうけ、大阪住友の銅蔵に貯蔵し、住友の銅吹所で諸道具、小細工・通宝などに製造して、自ら売捌かねばならなくなったので、そこで自由営業にとまな¹⁰⁾い、運上冥加銀のことも出て来たのである。

慶応4年1月10日に鰻谷の銅蔵は薩藩に押えられ、封印された。貯銅の内訳

銅座掛屋と住友家

は銅座仕入銀の引当分、対州侯よりの預り分、市中買請人への未渡分及び住友家の持銅35万余斤だったのを、ことごとく差押えられたのである。このため、吹大工、差子（助手）手伝などはその日から仕事を奪われ、糊口に窮していた。同時に差押えをうけた関係者も同様であった。¹¹⁾

そこで同年2月銅蔵封印を開封されたしと大阪裁判所へ嘆願している。¹²⁾ 慶応4年2月新政府は銅座取建の儀を達し、旧来の宿弊を改め、日新の事業にかえたいと申し渡したので、銅吹屋一同は願書を出した。

そこで銅吹屋一同は、これまで銅座と吹屋と別場所になっていては不取締りになる。一まとめにして、その場所へ役人が出張するようにしたいと2月15日に願出ている。住友吉左衛門を筆頭に、大阪屋又右衛門ら6人である。これは三岡八郎に提出されたが、やがてこの6人が「銅会所吹方御用」を仰せ付けられている。¹³⁾

この2月に新政府は旧幕府の銅座役所を廃止し、新たに銅会所を設置し、会計事務局の統轄下においたのであった。

そして住友らは鉾山掛の三岡八郎より銅会所吹方御用をみとめられたのである。¹⁴⁾

また慶応4年2月26日預り銅渡方及び元銅座への調達金下渡しにつき住友吉左衛門は書面を差出した。

このとき的一条に次のものがある。

一、「元銅座御借入金銀三井組私方面印形にて借入の方并に吹銅切手引当に差入借入の分共凡二万両近々御座候此分も最初より地役所へ御返済方奉願上候へども、取調べ中の由にて今以て其儘相成銀主方より頻りに催促申出当惑仕候何卒此分を銅にて御下渡仰付度広大の御慈悲難有奉存候事」¹⁵⁾

これによれば三井と住友が銅座掛屋としてなして来た銅座御借入銀のあと収束と思われる。これは、辰2月26日のことであった。

慶応4年銅座より吹屋6人に預銅を取調べて、会計局へ差出すようとの達し

があり、吹銅、古銅、荒銅、鉛、灰吹銀の数量を書上げている。¹⁶⁾

同年4月政府は内外国人をとわず、銅の売買と荒銅の諸器物鑄造を禁じ、諸国の生銅、古銅、地銅をすべて銅会所に廻送させ、会計官の内に貨幣司をおき、江戸旧金座吏長岡右京を貨幣司知事に任命した。¹⁷⁾

同4年4月会計事務局より荒銅古銅吹方を銅吹屋共は命ぜられたが、また銅座開設については2・30万両の金の手当がなくては復興は出来ぬ。そのためには預り銅をもって鑄銭吹方をしたいと出願している。そして元年閏4月には半朱銭の鑄造を建言している。錫鉛を交えない素銅をもってする半朱銭を吹立て、諸藩方并大阪十人両替に貸渡し、古金并に二分二朱金に引替え上納させたいと建言している。¹⁸⁾

同年4月住友は荒銅、古銅の吹方を命ぜられ、新政府から土佐藩管理の下に別子銅山の稼行と伊予4郡の食糧米の支給も許可される。そして住友の銅蔵の封鎖もとけ、政府の管理の下に大阪鰻谷の銅吹所における製鍊（精銅）を再開することになる。¹⁹⁾

この恩恵に対し住友は5月に貨幣司知事長岡右京に申し出で鰻谷の抱屋敷を貨幣司に献地した。また7月からは毎月1日と15日に住友家長が鉾山掛三岡八郎と貨幣司知事長岡右京に礼勤することになる。²⁰⁾

同年7月鉾山局より銅売上世話人共へ吹銅についての申渡しがあり、また鉾山局より「銅吹局心得書」を達せられた。²¹⁾

この年9月8日慶応を明治と改元、9月には別子銅山山手金・炭運上として1,000両の貢献を住友は申し出ている。

住友は明治2年正月に、別子銅山運上銀につき鉾山司へ出願しているが、同年2月に住友は「鉾山司掛屋」御用を申し付けられている。²²⁾

このように見てくると旧銅座掛屋としての職務は新政府になってもなお「鉾山司掛屋」としてつづいていたようである。

銅座廃止後も、太政官の銅会所より鉾山局、鉾山司と依然継続し、産銅は官に買上げられて来たのであるが、明治2年3月になって政府は銅の専売制度を

銅座掛屋と住友家

廃して、その買上げを一切停止するに至る。そのため自ら市場を開拓して、販路を四方に求めざるを得ないことになる。²³⁾

明治3年10月吉野屋町に建設されていた銅会所が、住友家名義に切替えられる。²⁴⁾

政府の銅山食糧米払下げは明治3年限り廃止になったが、嘆願により1ヶ年延期となり、4年5月に大蔵省布告をもって再び廃止となった。²⁵⁾

銅座専売制廃止後、3年3月に鉱山司の買上げをうけることになり、10月には大蔵省造幣寮に納入を命ぜられる。²⁶⁾すなわち大蔵省より吹屋6人へ申渡しあり、御用銅吹方のことは自今造幣寮の管轄になるから、諸事、同寮の指図をうくべしと達せられた。²⁷⁾

販路を求める必要から3年7月神戸において販売機関の設置を計画し、翌4年2月神戸市西本町通に銅売捌出張所を設けた。これは外商と直取引を開始するため、大阪九之助1丁目掛屋敷に泉屋栄蔵の空名あり、この名義を神戸に移し、泉屋栄蔵名義にて開店、苗字を称しうるに及んで白水栄蔵となる。神戸支店の前身である。²⁸⁾7月金、銀、銅の自由売買の禁止がかえって鉱業人の生産意欲をそぎ、産出額減少を見るにいたるのをうれい、自由売買を国内に限りみとめ、銅は五分税を課して輸出を許可するに至ったので、この製銅売捌所の設置となる。11月には神戸出店敷地を買得し、5年10月には神戸製銅売捌所を神戸支店と改称した。²⁹⁾

明治4年3月銅会所申合規則を定めた。これが銅吹屋6軒より家別500両宛を持寄って、たしかな両替屋に預けおき、この金子をもって荒銅の買入れにあてるものであった。会所の積金は仲間融通のために用い、会所は商人に入札を申し付けるものであった。³⁰⁾そして吹賃をも取りきめている。

チリーの銅輸出の増大の影響をうけて、銅価は下落し、輸出するにも安値で買叩かれる有様であったので、5年9月住友は銅商19名と銅商社を創立し、外商に対抗しようとした。加盟19人にて創立、大阪府に出願、聞き届けられたが、開業は延期となった。³¹⁾

明治9年本家吹所を廃し、豫州に移した。

別子山にて一番二番吹をなし、立川出店にも三番、四番吹をなし、製銅の上神戸出店へ送った。かつては荒銅にて豫州から大阪へ運搬し、これを本所吹所にて精製していたが、それは住友家が糺吹師にて、その製造を監督せねばならず、また旧幕時代には銅座にて束縛されていたためであった。維新後この束縛を解かれたので、豫州に移すことが出来たからである。³²⁾

元来銅座掛屋は、銅座に付随する金融業務である。両替屋、札差にて金融方面にて習熟していた住友が、諸藩の蔵元掛屋となり、また銅座掛屋になっていたことは注目すべく、維新後住友は永らく銀行業には直接進出しないが、富島町にて並合業として、早くから手をのばしており、もともと金融業、銀行業に進展する根はあったものと思わねばならない。

-
- (1) 「垂裕明鑑抄」地3
 - (2) 「垂裕明鑑抄」地3
 - (3) 「垂裕明鑑抄」地3
 - (4) 「垂裕明鑑抄」地3
 - (5) 「別子開坑二百五十年史話」236頁「垂裕明鑑抄」地3
 - (6) 「垂裕明鑑抄」地3
 - (7) 同上書 地3
 - (8) 同上書 地3
 - (9) 同上書 地3
 - (10) 「別子開坑二百五十年史話」1580頁211頁「垂裕明鑑」卷之23
 - (11) 「別子開坑二百五十年史話」262頁
 - (12) 「垂裕明鑑抄」地4
 - (13) 「垂裕明鑑抄」地4
 - (14) 「工部省沿革報告」(明治前期財政経済史料集成 第17巻 48頁)
 - (15) 「垂裕明鑑抄」地4
 - (16) 同上書 地4
 - (17) 「大蔵省沿革志」下(明治前期財政経済史料集成 第2巻 364頁1253頁)
 - (18) 「垂裕明鑑抄」地4
 - (19) 「垂裕明鑑」卷之23
 - (20) 「垂裕明鑑」卷之27
 - (21) 「垂裕明鑑抄」地4

銅座掛屋と住友家

- 02) 「垂裕明鑑」之23卷
- 03) 「別子開坑二百五十年史話」283頁
- 04) 「垂裕明鑑抄」地4
- 05) 「別子開坑二百五十年史話」282頁
- 06) 同上書 283頁
- 07) 「垂裕明鑑抄」地4
- 08) 「垂裕明鑑抄」地4、「別子開坑二百五十年史話」288頁
- 09) 「垂裕明鑑」卷之24
- 10) 「垂裕明鑑抄」地4
- 11) 「垂裕明鑑抄」地4、「垂裕明鑑」卷之24
- 12) 「垂裕明鑑抄」